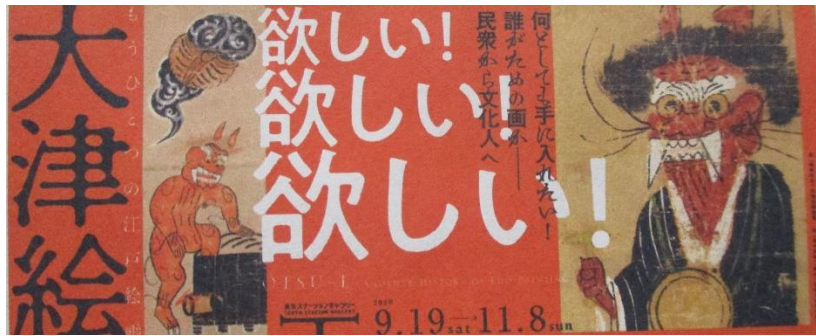


もうひとつの江戸絵画 大津絵

東京ステーションギャラリー 2020.09.19～11.08



「大津絵」は、近江国追分（髭茶屋追分）を発祥の地として1624～44（寛永年間）年頃に仏画として描かれはじめ、やがて世俗画へと転じ、18世紀頃よりは教訓的・風刺的な「道歌」を伴うようになった絵画である。この「大津絵」は、主として歴史資料や民族資料として扱われていたため、展覧会は博物館や資料館で開催されることが多くて美術館で開催されることは稀であった。

本展では「大津絵」を美術として捕らえ直し、狩野派や琳派でもなく、若冲など奇想の系譜や浮世絵でもない「もうひとつの江戸絵画」として魅力の迫る企画である。この絵画の画題は、「仏画」や「世俗画」で、神仏や人物、動物がユーモラスなタッチで描かれ「道歌」が添えられていることが特徴で、「道歌」には人間関係や社会に関する風刺が込めて表されている。



《猫と鼠》 江戸期 紙本着色 天敵との酒盛りを擬人化した愛らしい作品。他の主作品は《鬼の寒念物》（中図）、《大津絵巻》より外法梯子剃（右図）